

平成 22 年 6 月 14 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008 ～ 2009

課題番号：20820032

研究課題名（和文） 蝦夷地への異国船渡来に関する基礎研究

研究課題名（英文） Basic Study on the foreign ships came to Ezo in Early Modern Times

研究代表者

松本 あづさ (MATSUMOTO AZUSA)

藤女子大学・文学部文化総合学科・講師

研究者番号：90510107

研究成果の概要（和文）：本研究は、近世期における蝦夷地への異国船渡来事例のデータベース化と、各事例の内容分析を通して、異国船渡来という視座から蝦夷地の社会像および異文化接触の具体像について考察することを目的としている。この課題のもと、最も関連史料の多い北海道・東北地方における調査を重点的に行ない、収集史料の整理と分析を行なった。その結果、松前藩から幕府へ報告された以上の異国船航行件数や異国船乗組員との接触があったことなどがわかった。

研究成果の概要（英文）：This is a basic study on the foreign ships came to Ezo in early modern times. Concretely, I intend to investigate the documents related to these foreign ships, and make a database. So I had researched in Hokkaido and the Tohoku district in 2008-09. Through these researches, I could get some results, such as that there were lots of foreign ships came to Ezo than that the Matsumae clan reported to the Tokugawa shogunate.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	880,000	264,000	1,144,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,680,000	504,000	2,184,000

研究分野：日本史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本史、北方史

1. 研究開始当初の背景

本研究の開始以前、松前藩復領期（1821

年～1855 年）と呼ばれる時期に視座をおいて、当該期の蝦夷地に赴任した武士の記録を

検討してきたが、その過程で従来把握されていた以上に、蝦夷地への異国船渡来事例が多いことがわかった。

非日常の出来事である異国船渡来に際しては、様々な記録が残されたが、その内容は次の三点の意義が認められる点で重要であると考えられる。

(1) 近年、蝦夷地の研究については、在地に視座をおいた社会像の検討が重要視されているが、異国船問題という幕藩制国家的な問題からは、幕藩権力の視点を含めた蝦夷地社会像の考察が可能であること。

(2) 異国船側との接触から、前近代における異文化接触のあり方を具体的に把握できること。

(3) 蝦夷地に渡来した異国船側の記録からは、新たな近世蝦夷地社会像を知りうること。

以上のように、異国船渡来という切り口は、蝦夷地の社会像および異文化接触の具体像を考察するための素材となりうる。そこで、全国の資料所蔵機関において異国船渡来関連史料の包括的な調査を行ない、情報を公開する必要があると判断し、申請に至った。

2. 研究の目的

本研究は、近世期における蝦夷地への異国船渡来事例のデータベース化と、各事例の内容分析を通して、異国船渡来という視座から蝦夷地の社会像および異文化接触の具体像について考察することを目的としている。

研究対象とする時期は、箱館開港以前のいわゆる「鎖国」体制下とし、その期間における異国船渡来事例の包括的な把握をめざす。

このうち、データベース化に関する最終的な目標は、国内のみならず国外の史料も把握することにあるが、二年という研究期間を考慮して、今回は最も多くの史料が所蔵されている北海道・東北地方の調査に重点をおく。

データベース化作業と同時に行なう各事例の分析では、事例の概要はもちろんのこと、蝦夷地における防備体制、異国船側との接触内容について検討を深めていく。また、今回の課題申請以前に収集した異国船側の航海日誌についても分析を行なうこととする。

3. 研究の方法

本研究の主要な目的は、蝦夷地への異国船渡来事例の包括的な把握とそのデータベース化にある。

このため、史料調査が最も基本的な作業となる。調査地については、北海道・東北地方に重点をおきながら、本研究にとって重要な史料が所蔵されている長崎県・東京都・神奈

川県も含めることとした。

二年間の調査を通して収集した史料とそれ以前に収集した史料をもとに、異国船渡来事例を年表形式で整理し、データベース化していく。データベースには、各事例の関連史料の所在に関する項目を含める。

また、データベース化作業とともに、収集史料をもとに事例の分析も行なう。その際、蝦夷地における異国船防備体制、異国船との接触の諸相を中心に検討していく。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

現在、これまでに収集した史料をもとに、箱館開港以前における蝦夷地への異国船渡来事例のデータベース化に取り組んでいるところである。調査対象とした史料には、絵画史料も含めた。

収集史料の整理と分析を通して得られた知見を以下に五点記しておきたい。

① 松前藩から幕府へ報告された異国船渡来事例は、実際の渡来件数の一部である。特に、19世紀に捕鯨船の航行が急増すると、松前地では比較的熱心に警備がなされているのに対して、蝦夷地では異国船乗組員の上陸など事態が深刻にならない限り対応に及ばず、和人漁民やアイヌ民族から松前藩士への注進もなされない場合が多数あった。

② 蝦夷地への難破船漂着時の対応を検討した結果、松前藩から幕府への報告書には、蝦夷地での取調べを通して判明した異国船情報の全てが反映された訳ではないことがわかった。船籍や乗組員の名前など重要と思われる情報も、幕府に報告されないだけで、蝦夷地では把握されている事例が複数確認された。

③ 松前藩から幕府への報告書以外の記録からは、公的な報告書には記載されない、異国船乗組員と蝦夷地の人々との異文化接触があることがわかった。

④ 1831年に蝦夷地に渡来したレディ・ロウエナ号の航海日誌の内容から、蝦夷地近海の測量を実施し、それ以前の地図情報を更新しようとする捕鯨船があったことがわかった。

また、同船が松前藩士と接触する以前には、多くのアイヌ民族との間で物々交換もしくは贈与が行なわれており、日本側の記録には見られない異文化接触が確認された。

⑤ 1820年代以降に多くの捕鯨船が蝦夷地近海を航行するが、ラ・ペルーズやクルーゼンシュテルンなど、18世紀末から19世紀の初頭の探検家は蝦夷地近海の捕鯨産業の有効性を早くから指摘していたことがわかった。

以上のように、異国船関連史料をもとにした検討からは、異国船渡来時の実態を部分的

ながら明らかにすることが出来た。このような蝦夷地における異国船防備体制の実態、異国船乗組員との具体的な接触内容を蓄積することで、北方史のみならず近世対外関係史にも新たな論点を加えることができるものと考えている。データベース化作業とともに、今後もこれら①～⑤の論点について検討を深めていきたい。

なお、①～③については、松本あづさ「薪水給与令期間の蝦夷地における異国船問題」(『道歴研年報』第10号、2009年)、④～⑤については、松本あづさ「『鯨』から見る近世蝦夷地」(北海道東北史研究会留萌研究会、2009年8月8日、留萌市中央公民館)において、それぞれ成果の一部を報告した。

(2) 今後の展望

収集史料の整理を進め、データベース化の作業を継続することが第一である。また、上記の①～⑤の分析を深め、論文や史料紹介を通して公表していきたい。その際、これまでの検討は、19世紀に特化しているため、それ以前を踏まえる必要があると考えている。

なお、今回は、異国船渡来時の状況を記す史料のみならず、異国船への対処方針を記した史料も調査の対象としていた。その過程で、詳細な検討は今後の課題となるが、次の二点の知見を得た。

① 松前藩および長崎奉行所関係の史料から、外国人漂着民の長崎護送に関する詳細が明らかとなった。

② 第一次幕領期の東北諸藩の警備関係史料から、蝦夷地における異国船防備体制の構築過程の一端が判明した。

このような異国船への対処方針についても考察を深め、実際の異国船渡来時の状況とあわせて検討を深めていきたいと思う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

松本あづさ「薪水給与令期間の蝦夷地における異国船問題」、『道歴研年報』第10号、2009年、1-13頁、査読有

〔学会発表〕(計1件)

松本あづさ「『鯨』から見る近世蝦夷地」、北海道東北史研究会留萌研究会、2009年8月8日、留萌市中央公民館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 あづさ (MATSUMOTO AZUSA)

藤女子大学・文学部文化総合学科・講師

研究者番号：90510107